

地の塩、世の光として

(マタイ5・13〜16)

一、だれがだれに語られた？

13節に「あなたがたは地の塩です」とあります。このことばは、だれがだれに語られたのでしょうか。まず「だれが」ですが、主イエス・キリストです。次に「だれに」ですが、聖書を初めて読む方であるなら、自分に対して語られたことばと感ぜられるでしょうか。そうであるなら、すばらしいことです。

ですが、ここに書かれていることの前後関係を考えるようになりますと、さらに考えさせられます。5章1節、2節より、「イエスさまは弟子たちに語られたのだ。しかし群衆もいたよな。群衆にも語られたのかな？」と考えるようになることでありましょう。ところが11節には、こう語られています。「わたしのために人々があなたがたをのしり、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いです。」と。そうしますと、「これは群衆ではなく、弟子たちに語られているな。群衆は入っていないな」と考えるようになります。ですが、7章28節になると「イエスがこれらのことばを語り終えられると、群衆はその教えに驚いた。」とあります。「なんだ。群衆も聞いてい

たんだ」となるわけです。

では、最初に戻りますが、13節の「あなたがたは地の塩です」は、主イエス・キリストだけが語ったことばでしょうか。考えてみますなら、このことばは、マタイの福音書において語られています。マタイは、主イエス・キリストが語られた大切な教えを「山上の説教」としてまとめ、5章、6章、7章に記しています。ということは、主イエス・キリストが語られたことばであると同時に、福音書記者のマタイが、聖霊による「ゴントロール」の下で語ったのだ、という構図も見えてまいります。そういうわけで、「だれがだれに語られたのか」という視点から見ても行くだけでも、聖書はなかなかおもしろい書です。

二、地の塩であること

いずれにしても、13節の「あなたがたは地の塩です」は、主イエスが「自分」に、そして「自分たち教会」に語られていることばとして読むわけです。

そこで考えてみたいことがあります。「あなたがたは地の塩です」と、「あなたがたは世の光です」をセットにして置いているのは、マタイの福音書だけであることです。私は、この二つは別個のものではなく、一つのこの両面であると考えます。「一つのこと」とは、主イエス・キリストを救い主、また神と信することです。主イエス・キリス

トを、私共を罪の状態から回復させる、神が遣わされた唯一の救い主と信することです。その人は、あるいはそういう人々は、地の塩、世の光とされています。

「私はイエスさまを信じたのだから、地の塩となろう！世の光となろう！」ではなく、信じたときに神の働きにより、「地の塩、世の光」とされているのです。では、「地の塩」はどういう意味で語られているのでしょうか。塩は昔から、食物の味付け、あるいは防腐剤としても使われていましたから、そのように適用したら良いのでしょうか。13節の続きに、「もし塩が塩気をなくしたら、何によって塩気をつけるのでしょうか。もう何の役にも立たず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけです。」とあります。様々な訳を見ますと、「塩」は、「塩味」と「防腐剤」の両方の意味で訳されています。このあたりは、主が語られたことばの幅かと思えます。主イエス・キリストを信じますと、私共は地の塩になります。キリスト者は世界の中で、キリストが醸し出される独特の塩味を持っているのでありましょう。自分では分からないのですが、そういう味を持っているのでありましょう。これは神のわざによりますから、「よし！きょうから自分は塩味を保つぞ！」と力まなくてよいわけです。塩味を持つようになるのは、主イエスを信じたときにもたらされる神のわ

ざです。聖霊が、信じる一人ひとりに為さるわざです。

三、世の光であること

14節をご覧ください。「あなたがたは世の光です。山の上にある町は隠れることができせん。」とあります。前半の「あなたがたは世の光です」は、あなたがたは地の塩ですと同じく、私共がそうなるうとしてなるものではありません。信仰者は主イエス・キリストを信じて正直に生きて行ったら良いと思う者です。15節、16節をご覧ください。「また、明かりをともして灯の下に置いたりしません。燭台の上に置きまします。そうすれば、家にいるすべての人を照らします。このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせなさい。人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようになるためです。」とあります。私共は「世の光」とされ、「あなたがたの光を人々の前で輝かせなさい」と語られています。言い換えるなら「人々があなたがたの良い行いを見」ることです。「良い(カロス)」の意味は、中身が良いと言つよりも、外側が美しい、の意味です。そういうわけで「あの人はとてもいい人なんだけれども、愛想が悪い」では困ってしまいます。キリストを信じて、内側にある喜びが外側に出るように、ぜひ努力していただきたいです。